



安城市議会議員 石川つばさ通信 号外

市政レポート

革新勢力の再興へ 我々に足らざるものは何か④

5 月 14 日号から 3 週続けて掲載した記事の続編です。今後も不定期掲載とします。

今回は、革新勢力停滞の要因としてあげた 3 つの項目の内、2 つ目の「新陳代謝が無く、内輪にしか通じない難解な用語やスローガンの多用で、世間と溝が生じた」という点について論じていきます。

革新勢力に「新陳代謝が無い」という点を否定できる人は殆ど居ないものと思います。かつての様な「安定を求める高齢層は与党を支持、変化を求める若者は野党を支持」といった図式はとうに崩壊しており、20 代・30 代といった若年層ほど自民党支持が高くなっています。現在行われている参院選世論調査でも概ねこの傾向が表れていますし、統計を持ち出すまでもなく、革新系主催の憲法集会などに出かけてもそこに集う大半が団塊世代かそれ以上の人々であることは一目瞭然です。世の高齢化のスピードを凌ぐ勢いで革新勢力のそれは進行しています。

鶏が先か卵が先か分かりませんが、新しい人が入ってこない状況下、内輪では通じる難解な用語やスローガンはますます「外」との溝を広げています。そして、そう感じているのはどうやら私だけではないようです。政党や労組関係者の内、数少ない若年者と話をすると大概同じような感想を口にしますし、ベテラン活動家の一部にも、自分たちが「特異な集団と見られている」という危機意識を持っている人がいます。

今年5月の新社会党愛知県本部大会には、本部から千葉雄也総務局長が出席されました。その中で千葉局長は、スローガンの中身は間違っていないとしつつ「『野党は共闘』『海外派兵のための改憲反対』『国民に負担を強いる消費税増税反対』では国民の気持ちはつかめない」とされました。これには同感です。千葉局長同様、私もスローガンの内容には賛同しますが、このスローガンだけで広く支持を得るのはなかなか難しいと思います。例えば「野党は共闘」を例にとっても、それによって何が良くなるかが示されなければ多くの人に関心を向けてもらうことはできません。元々の(それこそ何十年来の)野党支持層の関心はひきつけられても、与党支持層の一部を切り崩すことは困難です。さらに言えば、半数近くが棄権している状況の中で、「与党・野党」という構図自体がどれほど浸透しているかも考える必要があります。多くの場合、「自民・公明の与党、立憲・国民・共産・社民などの野党」という構図を誰もが頭に描けている事を前提とした訴えがなされてきたように思います。しかし、実際この構図はどの程度浸透しているのでしょうか？もし浸透していない場合や、そもそも与党と野党の違いが認知されていなければ、「野党は共闘」というスローガンは全く響かないものになってしまいます。

これまでの運動の継承はもちろん必要ですが、それ「だけ」でいいのかと問われれば疑問です。あらゆる組織に通ずることですが、勢いのあった時代に大人数で行ってきたことを、少なくなった人数でそのままなぞろうとすれば必ず無理が生じ、良い結果にはなりません。こうした問題意識を共有できる、革新政党、労組、民主団体に身を置く数少ない若年層が新しいアプローチの仕方を模索・立案しなければ、従来通り・例年通りの仕事を「こなす」だけの縮小再生産が今後も続くでしょう。ベテランの指示待ちを脱し、若年活動家の自立が無ければこの問題は解決しないと考えます。